
夢見る少女 惑わしの死神

朝葉赤飯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見る少女 惑わしの死神

【Nコード】

N3632V

【作者名】

朝葉赤飯

【あらすじ】

三つに分断された世界の一つ”境界”に所属する死神達。次々と異変が起き世界が軋みを上げる中、彼女達はいつまで日常していられるのでしょうか。

この小説は過去にブログで公開していたのを引っ越したものです。ほぼ改変無しで一時的に移しているだけなので、後ほど手が加えられる可能性が高く、また続きがいつ書かれるのかは不明です。その点ご理解ください。

微妙な笑顔でお出迎え（前書き）

昔に書いた小説ですので、編集や改変が入る可能性があります。
ご了承ください。

微妙な笑顔でお迎え

「貴方は死にました。川を渡る準備をしておいてください」

こんな事が書かれた看板が、ポツンとひとつ立っていた。

周りを見渡しても霧で見えにくい、近くに川があるのかすらうかがい知ること叶わない。

私は、このあからさまにへんてこりんな看板を、おかしいとは思わなかった。

勿論、普段なら違和感を感じたはずだが、今回は少しばかり、状況が違っていたから。

確かに少し前、私は死んだ”はず”であった。

目が覚めたら、見覚えのない世界にいきなりいるということは、ここがあの世なのだろう。

想像していたものとは全く違う世界だったが、実際この程度なのかも知れない。

天国なんて、人々が死の恐怖から逃れるために描いた幻想にすぎないのだから。

「お待ちしておりました」

突然、上から声が聞こえてきた。ハッと見上げてみると、かすかに空から落ちてくる黒い物体が見える。

一瞬にして地上に到達したその物体は黒光りしている刃物。

「これ…… 鎌？」

地に深く突き刺さったそれは、人が扱うには大き過ぎる大鎌だった。

しかしまあ、とんでもないものが落ちてきたものだ。これが当たったりでもしたら私は真つ二つだろう。

死んでいる時にもう一度死ぬとどうなるのだろうか…

「……すみません、鎌を落としてしまいました」

そんな事を考えていると、鎌の持ち主であろう少女が、上空から降りてきた。

言っている事自体はお茶目な内容なのだが、全く動じていない声色がその感覚を見事にかき消している。

見た感じ、15〜16歳程度の外見。顔は整っており、幼さは微塵も感じさせない。あくまで外見の話だが。

しかしながら、鎌を落とすというあり得ないミスとのギャップに顔がニヤけてしまう。

彼女はただ「？」が頭上に出ているような顔で私を見つめるだけだった。

やがて、その微妙な空気を飛ばすように、その小さな口が言葉を紡ぐ。

「貴方は、ここがどこかお分かりですか？」

いきなりの高難易度問題。ヒントも何もないのに分かる方が不思議というもので。

ならばと半ば投げやりに

「あの世」

とだけ答えた。それ以上情報がないのだから仕方がない。

「確かにあの世、という解釈は間違っていますね。」

人の間ではあの世と呼ぶのが普通だそうですから「

」ですが、正確には違います。ここは、貴方の言うあの世とこの世を繋ぐ境界の様な場所。

川の向こう側が、あの世です」

当たらずとも遠からず。

というかそんな詳しいこと分かるわけがないだろうに……

「その川ですけど、どこにも見当たりませんが」

さつきから疑問に思っていた事をぶつける。そう、霧で何も見えないが、それだけではない。水の流れる音も聞こえないのだ。

「そうですね……　そう思うのは不思議ではないでしょう。でも、その前に」

と、彼女が少し顔を伏せてから、また話し始めた。

「貴方は自分が死んでしまったことを素直に認め、次の道を歩むための準備をすることをここで誓ってください」

「未練あるものが川を渡ってしまうことは望ましくないので」
話す彼女の顔は、驚くほど涼しげだった。眉の一つも動かさない。最初に登場した時との変化は、その手が鎌の柄の部分握っているだけだった。

死を認めるのは怖いことだ、でも、もうどうしようもない。

半ば諦めのような感情が溜息として体から出てしまった。今ようやく、事の重大さに気付き始めた自分が嫌になる。

死にたくはなかった。まだ年もあまり食っていない。まだまだこれからの人生だったのに。

なのに、自分たちの手によって作られた、鉄の塊に吹き飛ばされて逝くなんてなあ。

人間が創造した物に殺される人間というのも、中々滑稽じゃないか。それが普通だったりするから怖い。

考えれば考えるほど、悔いることが多く、また溜息が出る。

だけど、次の道へ進まなければいけない。

今までの私は私として、少し前まで他の世界に存在していた。それは事実なのだ。

消えうせることを嘆くのではなく、またやり直せることを少し幸運に思った方がいくらか気持ちが楽になる。

そして、次の私へ繋ぐための準備として、ここを超えなければならぬ。

軽く深呼吸し、気持ちを落ち着かせた後、少しずつ言葉を紡ぐ。

「未練はないと言えば嘘になります」
はつきりと、迷いがないように。

「でも、悔やんだりしたってどうしようもないじゃないですか。そんな事を考えるより次生きる時の事を想像してた方がずっと楽しいです」

「次につながるためならば、このぐらい余裕で越えていかないか」と
「……それに、ここちょっと寒いので暖かい所に行きたいです」
少し、いつもの調子が戻ってきた。だいぶ喋りやすくなってきた感じがする。

彼女はというと、
「そうですか」

とだけ返し、隣に刺さっている鎌を抜く。

そしてその刹那、空気が切り裂ける音がしたかと思うと、霧が全て消えてしまった。

見ると、また地に鎌が突き刺さっている。落ちてきた時よりも深く刺さっているんじゃないだろうか。

あれだけの大きさの鎌を振り下ろすとは…… 案外怪力の持ち主かもしれない。

自分の背丈ほどあるのをそう簡単に扱うことなどできやしない。

普通なら。

その異様な光景に頭が混乱しているところへ、少しばかりの音が聞こえる。

それは、水が流れていく、とても幻想的な音だった。

ふう、と一息つく、彼女が喋り始める。

「これで見えるかと思います。」あの世とこの世の境界線”が。貴方たち”外界”の人々が”三途の川”と呼んでいるものです」

「川原に船渡しがありますので、声をかけてください」

「あれ、てつきり貴方が連れて行ってくれるのだと思ってました」
「私はここで説明や確認をするのが仕事です。」

向こうに行けばまた別の方が案内してくれます」

そして、少しだけ笑顔。その表情は、ごく普通の少女だった。

迷いはなく、透き通った印象を相手に与える類の。

思わず見とれてしまい、また彼女にいぶかしそうな眼つきをされてしまった。

至極当然である。長く見つめられたら気分も悪くなるものだ。そっと心の中で謝っておくことにした。

突然、思いついたように質問を投げかけてみる。

どうせここで別れるのだ、今聞かないと一生後悔する。いや、来世でも後悔してしまう。

聞く価値があるのかは置いといて。

「川つて、ここに流れているのだけなのですか？」

魂が行きつく先がここならば、人が足りないように思えるのですが……」

一日に大量の魂が、行先を失っている。戦争があったりすると余

計に増えてしまっただろう。

そんな状況の中、ここだけで管理しきれんのだろうか。ここに辿り着く魂といちいち会話なんてしてたら、そのうち行列が出来あがる。

それに、死神の姿も見えないのだ。私の瞳に映る彼女一人を除いては。

「いえ、境界に流れる川は他にもあります。ここはその中の一つ”夢見の川”

ここは少し特殊な場所ですから、たどり着く魂もごく少量です。なので普段は私と船頭の二人で事足りるのです」

尚も涼しげな態度を崩さない。表情の変化が実に乏しい。

少し無愛想すぎるぐらいの態度、それに口から出る言葉がどれも簡潔だ。

自分が長く話すことをあまり好ましく思っていないのかも知れない。先ほどの笑顔はどこへやら。

「長く話し過ぎると、暇で仕方なかったと私が怒られてしまいますので、そろそろ川原に」

理不尽な理由で怒る人、いや、死神もいるのだ。思わず苦笑してしまう。

あまりにも滑稽過ぎる情景を想像してまた笑いがこみ上げて来てしまったが何とか耐える。

「わかりました、とても楽しかったです。ここに来て初めて話したのが貴女でよかった」

そういうと、彼女はペコリと一礼。

「ああそうだ、最後に名前を聞かせてはくれませんか？聞くのは一時の恥、聞かぬは一生の恥とかいうじゃないですか

…… まあ、死んでるんですがね」

少し使い方を間違えたような気がしなくもないが、もう関係なかった。一秒でも、会話を楽しみたい。

クスリとつつむきながら笑うと、顔をあげて、また微妙な笑顔を
見せながら

「私は、惑香です。貴方の往く道に幸多き事を」

私は満面の笑みで礼を述べた。ありがとう、と。

彼女の最高の笑顔を見れなかったことが唯一の心残りになるかもしれないと思いつつ、背を向けて歩き出した。

私の歩く道は、短いようでとても長い。少し立ち止まっていたけれど、これからまた、歩きだす。

スタート地点に戻るまで、しばらく”私のままで”いられる。そのことに喜びを感じながら、生と死の境界線へ、砂利を蹴り、一歩ずつ向かっていこうと考えた。

今日の仕事はこれで終わりだろう。

近くにあった石の上に座り、今日はどんなお茶を飲もうかと考えながら また一人冥界に旅立つ魂を見送った。

生きる事は夢き事と見つけたり。

日記の最初に書かれた文字が、妙に寂しそうな光りを発していた。

異変の花びらは湯呑みに浮いて

魂を運ぶ三途の川は、今日も平和であった。

水の穏やかな流れ以外を知らない”夢見の川”では、二人の死神が今日も退屈そうに座っている。

「暇ねえ……」

お茶を片手に何故か立っているその死神は、深くため息をついた。
「いつもの事です、由子さん」

もう一人の死神が、座りながら空を見上げ、答える。

「働くのは嫌だから仕事が少ないのは良いけれど、これはちょっと退屈すぎね」

そう言って歩き出すのは、一応私の上司である”かがり 篝 ゆこ 由子”
普段は船頭の仕事をしている死神。寿命を過ぎてもまだ生きる魂に警告を行うのも彼女の仕事だが、面倒なのでやらないらしい。

「ここは特殊な場所、わたって往く魂は少ない事ぐらい当然です」
私はそつけなく答える。

「わかってるからこそ退屈になるんだ。死神の素質を持った人間、何人が死なないかしら」

またとんでもないことを言い出すものだ。私は思わず苦笑いしてしまった。

ここ”夢見の川”という所は、境界の中でも外側に位置している。霊が少ないのは、ここが”死神の素質を持った”魂しか、渡ることが出来ないからだ。

そんな類稀なる素質を持ったのが沢山いる訳がない。一日の仕事の中で訪れるのは、精々五つぐらいだろう。

別に今日に限った話ではないのだ、この退屈さは。

しばしの沈黙が続く。聞こえる音と言えば川の流れる音、風のささやき。

そんな自然の歌声をかき消す様に、由子が喋り始める。

「……ふう、こう暇だと体が鈍っていけないね。」いつもの場所”にでも行かない？」

そう言っ指差した先にあるのは、一本の桜の樹。

川がある場所には必ずあると聞いたことがある、とても不思議な桜。

眼だけで感じるのは勿体無いくらい幻想的であり、儚い。

花びら達はより一層の美しさを魅せることによって、幻想を集め、それがまた花びらになる。

想いや夢等が連なり、出来上がっている為、境界にしか存在することはできない。

「準備してから行きましょうか。お酒は駄目ですからね」

「少しぐらい飲んだって問題ないでしょ」

「駄目です」

休憩という大義名分の下、仕事をサボる時は、大抵樹の下で過ごしている。

今日もまた、そんな調子で向かうのだった。

「……こりや凄い」

桜の樹に到着した私たちは、眼を疑った。

樹の周り一面にわたり広がる、蝦夷菊の花畑。

ここは天国であって天国ではない。お花畑が見えるとよく言うが、それは無意識からなる錯覚に過ぎない。

それだけに、この状況はまさに”異常”の一言に尽きる。

「外界で何かあったのでしょうか」

驚く事よりも、この異常の原因の方に興味が湧く。

「さあねえ、私達の知った事ではないよ。ただ……」

少し間を開けて、また話し始める。

「ここに異常が起こるということは、外で何らかの事が起こったのは間違いないね。

ただし、”外界の影響”とは限らないんだが……」

外側に位置している夢見の川は、外界の異変の影響が一番でやすい場所ではある。

しかし、こんな直接的な影響が出ることなどありえるのだろうか

……

「異変の前兆かもしれないし、作為的なものとしても十分ありえるだろうね。ただ、すぐに何かが起こるわけでもなさそうだねえ」

私には、なぜすぐに起こることがないのか、その理由がわからなかった。

引っ掛かることは、ここにしか咲いていないこと。そしてその咲いている花の種類。

「アスター、花言葉は追憶、変化

外界では珍しい花ではないけど、境界で発見された事はない筈……」

……

この花に意味はあるのだろうか、”アスターでなければいけない理由”が。

変化が近いことを暗示しているという風にも捉えられる。はたまた、桜の気まぐれの様な気もしてくる。

「へえ、花が好きなのか。こりゃ意外だ」

物思いにふけていると、由子がニヤニヤしながら近寄ってきた。「好きなのは事実です。しかし、少し詳しいだけで判断するなんて

安易すぎやしませんか？」

そう言い放つと、今度は苦笑いしながら

「まあまあそう怒るなって。別に否定しているわけじゃないんだからさ。しかしまあ……」

ふと、由子が桜を見上げる。

「こいつが何を感じているのか、何を想っているのか、全く判らないってのは少しばかり悔しいねえ」

私も同じように見上げる。少しの風に揺らされて、花びらを散らせていく様は眩しいほどに、美しかった。

「さて、気を取り直して酒でも飲もうかな」

あれほど注意したのにやはり持つて来てしまったらしい。彼女らしくはあるが、今は仕事中である。

「はあ……貴方は、その酒好きな性格を変える必要がありますそうですね……」

深くため息をつく。いつもの事ではあるけれど、そろそろどうにかして貰えないものか。

酒臭い死神に舟を渡してもらうなんて、送られる魂にとっては不愉快だろう。

大抵そんな心配は杞憂に終わってしまうので、結果仕事中に酒を飲むのが日常になってしまう。

それが繰り返されていく悪循環、抜け出すのは容易ではない。

また深くため息をつきながら、お茶をすする。

と、そこへ杯を持った由子が近付いてきた。

「しかしなあ、これじゃ死神になるはずの魂達が、中々”死神として転生”出来ないかもねえ」

唐突な話題、言葉を発するのに少し時間がかかってしまった。

「そうですね、昨日の魂も、立ち往生を食らってるかも知れませんか」

中々死神にならない、それには理由がある。

ここを訪れた魂を見送る際、私達は死神として適正かどうかを簡単にチェックする。

そして冥界にたどり着くまでの間に、閻魔に会わせられるかどうか、その他様々な私的判断と共に、総本山に送るのだ。

次に、閻魔から課されるいくつかの課題や面接を超えて、認められれば死神になれるのだが……

「外側に位置しているここで異変が起こるのは、外界からの影響が考えられます。」

由子がうなずき、少し厳しい表情に変え、話し始める。

「そうになると、中央が慌ただしくなることは明白。」

まあ、そんな大規模な事でもないからすぐ治まるだろうけどね」
ただし、と次を紡ぐ。

「やはりある程度は閻魔様との接触が難しくなるだろうねえ。」

たとえ、それが死神になる魂だったとしても」

そう言つて、由子は天を仰いだ。

その時の彼女の浮かべる表情の真意は、私には掴めなかった。

「でも、あまり関係の無い話ではないでしょうか。」

ここは全くもって退屈ですから、人を増やすなんてこと、万に一つも無いでしょう」

そう言つて、二人で軽く笑いあふ。

いや、由子が笑っていた、という表現の方が正しいかも知れない。笑い方を知っているのは彼女だけ。

表情の作り方というのが、私にはよく分からないから。

「そんな顔で笑わないでくれよ、まるで私が笑われているみたいじゃないか」

消極的な思考に陥っているのを、暗に指摘された気がするので

少しだけ、反撃してみようかという気持ちが抑えられなくて

「元から、そういうつもりでした」

つい、口に出してしまっていた。

結果として、私には微妙な笑みが帰ってきた。 当たり前だ。

今日もまた、ゆっくりと時は進む。

外界と時間の概念は全く一緒だ。死神だって元は人間、向こうと同じ時の動きの方が過ごしやすいだろう、という閻魔様の配慮かららしい。

そんな理由よりも、私は、一日の移り変わりの美しさが毎日楽しめる幸福を与えてくれる為の時間、という解釈の方が好きだった。

日は、もう傾き始めている。橙色の優しい光が、桜の樹を別の物へと変えていく。

「さて、帰りますかあ」

少し酔っているらしい由子が、フラフラと寄ってきた。 もっとも、いつもフラフラしているのであまり違いが判らないが。

私は日記を閉じ、立ち上がる。

「ですね。 もうこれ以上ここにいと動けなくなってしまうそうです」

軽く伸びをして、服についた花びらを払い落しながら歩き始めた。

「今日も一日暇だったなあ」

「明日は、仕事があるといいですね」

「暇すぎても困るけど、やはり進んで働きたいとは思わないね・・・」

ふと振り返ると、桜の樹と大量の蝦夷菊が、私達を見送っていた。時折風になびくその姿は、来た時よりも更に儚げに見えたのが、とても印象的であった。

夢き事、人が夢見ること。

魂が見た幻想達は、花びらに乗せられて、何処までも往くの
だろうか。

日記に刻まれたその文章も、やはりどこか儚げだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3632v/>

夢見る少女 惑わしの死神

2011年8月1日03時35分発行